

河合太郎軍楽長時代の

呉海兵团軍楽隊における奏楽実態

—新聞資料を中心に—

竹下 可奈子（広島大学大学院教育学研究科博士課程後期）

はじめに

近代日本の洋楽史を考えるうえで、明治最初期から洋楽を学び、その普及に貢献してきた軍楽隊の存在は非常に重要である。そしてそれは広島という一地域においても例外ではない。明治二三（一八九〇）年に呉鎮守府に配置された呉海兵团軍楽隊（写真1）は、太平洋戦争終結にともない昭和二〇（一九四五）年に解体されるまでの五五年間、横須賀海兵团にて教育された高い水準の音楽技術を、儀礼奏楽や演奏会を通して広島県民に広く提供した。また、退役した隊員が市民音楽団体の創設や発展に大きく寄与するなど、広島洋楽文化発展に貢献した役割は大きい。しかし、『第一回中間報告集』⁽¹⁾においても指摘したように、その詳しい活動内容については未だほとんど明らかにされていない現状がある。

これまでに、呉海兵团軍楽隊を主眼点とした研究を行っているのは、道下京子⁽²⁾、桑原功一⁽³⁾の二名である。そしてその両氏とも、昭和四六（一九七一）年に『呉日日新聞』にて連載された、「呉海軍軍楽隊」⁽⁴⁾をおもな参考資料として用いている。

「呉海軍軍楽隊」は、久保田利数によって五〇回にわたり連載された囲み記事である。当時まだ存命中であった、元呉海兵团軍楽隊長河合太郎の協力のもと執筆されたようで、非常に貴重な資料となっている。おもに呉海兵团軍楽隊の創設からの流れや活動について紹介されているが、それだけではなく、『君が代』の普及や、当時の呉市の音楽情勢についても触れられており、内容は幅広い。呉海兵团軍楽隊の奏楽実態に関しては、明治二八（一八九五）年から昭和一〇（一

九三五）年までの四〇年間のうちの、二七回の演奏会が、そのプログラムとともに紹介されている。ただ、それらの演奏会情報については出典が明らかにされておらず、それぞれの演奏会についてそれ以上精査することが難しい状態にある。また、無作為に選ばれて紹介されているうえに、数も多くないために、それらをもとに年代による変化やそのレパートリー内容についての検討を行うことは不可能である。

そこで本稿では、河合太郎

が隊長に就任していた大正九（一九二〇）年から昭和三（一九二八）年までの九年間にまず焦点をあて、当時の新聞を中心に、新たにその奏楽実態の調査を行うこととした。大正から昭和にかけては日本海軍の一大躍進時代でもあり、海軍軍楽隊全体でも革新的な業績が数々あげられた。⁽⁵⁾それは呉海兵团軍楽隊においても例外ではない。河合太郎が市民への奏楽提供や、管弦楽編成の充実に力を注いだ時期の奏楽実態をまず明らかにすることで、呉海兵团軍楽隊の五五年間の歴史をひも解く足掛かりにするとともに、広島洋楽史研究の一助としたい。

一 河合太郎および使用資料について

（一）河合太郎について

河合太郎は金沢の生まれで、明治三四（一九〇一）年六月に横須賀海兵团に軍楽兵として、十七歳で入団した。楽器はコルネットで、明治三六（一九〇三）



写真1 呉海兵团演奏会（大正12年）（三浦精子氏所蔵）

年春には普通科練習生を修業した。三等楽手で参加した日露戦争では、東郷平八郎司令長官座乗の連合艦隊旗艦「三笠」に乗り組み、伝令として参戦した。その後、大正二（一九一三）年には軍楽師、大正八（一九一九）年には軍楽長に昇任し、大正九年十一月一日、海軍軍楽特務中尉で呉海兵団軍楽隊に楽長として配属された。在任中は、通常の儀礼奏楽等の仕事に加え、一般市民向け夏季演奏会の実施や、地元の女学生との共演など、市民への音楽普及にも力を入れた。また、彼の時代に呉海兵団軍楽隊には管弦楽編成が導入されている。昭和三年十二月に軍楽特務大尉として退役し、その後堀内敬三に招かれNHKと日本ビクターにおいてプロデューサーの仕事を行っている。

戦時中、東京で空襲にあったのを機に呉に疎開し、その後は呉に定住した。戦後も、中国吹奏楽連盟会長、呉市民交響楽団指揮者、海上保安大学校、海上自衛隊少年術科学校、呉造船所吹奏楽団各講師などの役職を兼任し、広島県の音楽活動の充実に貢献した。⁽⁶⁾ 昭和四一（一九六六）年には、呉市在住者としては初めてとなる中国文化賞を受賞している。⁽⁷⁾ また昭和四五（一九七〇）年には勲五等双光旭日章も受章している。

広島市民交響楽団の理事長を務めた高橋定や、広島市出身の作曲家陶野重雄へも大きな影響を与えた。⁽⁸⁾ 在任中、退官後ともに呉市の音楽文化啓蒙に尽力した人物であり、歴代の軍楽長の中でも、非常に重要な人物のひとりであるといえる。

（二）参照した資料について

今回おもに参照したのは、『芸備日日新聞』、『中国新聞』、『呉新聞』の三紙である。

『芸備日日新聞』は明治二二（一八八八）年に発行を開始した、明治・大正期における広島最大手の地方新聞である。本社は広島市大手町にあり、広島市に関する記事が中心となっている。呉市に関する記事は少なく、そのため呉海兵団軍楽隊についてもあまり多くは触れられていない。

『中国新聞』も『芸備日日新聞』と同じく本社を広島市におく地方新聞であり、こちらは明治二五（一八九二）年に創刊された。最初期こそ発行部数において『芸備日日新聞』に水をあけられていたが、大正初期には横並びとなっている。そ

して昭和に入るところには『芸備日日新聞』を完全に抜き去り、広島最大手の地方新聞となった。その後昭和十（一九三五）年には、芸備日日新聞社の経営権を得ている。⁽⁹⁾ 『中国新聞』では「呉版」あるいは「地方版」という頁を設けており、呉海兵団軍楽隊関係の記事はその頁に掲載されている場合が多い。

これら二紙に対して、呉市に拠点を置いたのが『呉新聞』である。『呉新聞』は大正十三（一九二四）年に、『中国新聞』の姉妹紙として創刊された。⁽¹⁰⁾ 海軍所在地の日刊新聞として重宝され、昭和十六（一九四一）年には一県一紙制導入の流れに逆らい、中国新聞社から分離して独立紙となっている。⁽¹¹⁾ 『呉新聞』という名の通り、呉市に関するニュースが非常に詳しく扱われており、海軍関係の記事も多い。三紙の中で、もっとも頻繁に呉海兵団軍楽隊について報じている新聞である。

また、これらの新聞資料にくわえて、呉市産業部海事歴史科学館学芸課ならびに海上自衛隊呉音楽隊に所蔵されていたいくつかの資料も参照している。

今回は紙面の都合上、式典等での儀礼奏楽は取り扱わず、純粋な演奏会形式の奏楽について提示、考察を行う。呉海兵団軍楽隊による演奏会形式の奏楽は、軍楽隊単独で開催したものと、市民団体への客演の二種類に分けられる。今回はそれぞれを別に扱い、提示することとする。

二 単独演奏会

呉海兵団軍楽隊による市民への公開演奏が最初に行われたのは、明治四四（一九一）年のことであるが、この頃はまだ不定期の開催だったようである。⁽¹²⁾ その後、大正六（一九一七）年に呉市二河公園に音楽堂が建設され、河合太郎が就任した翌年の大正十（一九二一）年から、おもにその音楽堂を使用し、夏季に定期的な市民向け演奏会が開かれるようになった。

表1に、大正九年から昭和三年までの、呉海兵団軍楽隊による単独演奏会の記録をまとめている。左側に◎を付しているものは、そのプログラム内容まで明らかにしているものである。

記載している演奏日時、そのほとんどが新聞紙面で予告されたものであり、

表 1 呉海兵団軍楽隊単独演奏会の記録

日時	演奏会名	場所	出典
大正 9 年 (1920)			
記録なし			
大正 10 年 (1921)			
◎ 6 月 8 日 (水)	連合軍楽演奏会	二河公園音楽堂	『中国新聞』6 月 8 日
◎ 7 月 16 日 (土)	夏季演奏会	二河公園音楽堂	『中国新聞』7 月 16 日
◎ 7 月 23 日 (土)	夏季演奏会	呉水交支社	『中国新聞』7 月 23 日
◎ 7 月 30 日 (土)	夏季演奏会	二河公園音楽堂	『中国新聞』7 月 30 日
◎ 8 月 20 日 (土)	夏季演奏会	呉水交支社	『中国新聞』8 月 20 日
◎ 8 月 27 日 (土)	夏季演奏会	二河公園音楽堂	『中国新聞』8 月 26 日
◎ 9 月 3 日 (土)	夏季演奏会	呉水交支社	『中国新聞』9 月 3 日
	9 月 10 日 (土)	二河公園音楽堂	『中国新聞』9 月 10 日
◎ 9 月 17 日 (土)	夏季演奏会	呉水交支社	『中国新聞』9 月 17 日
◎ 9 月 29 日 (木)	夏季演奏会	二河公園音楽堂	『中国新聞』9 月 29 日ほか
大正 11 年 (1922 年)			
◎ 8 月 26 日 (土)	夏季演奏会	呉水交支社	『中国新聞』8 月 26 日
◎ 9 月 2 日 (土)	夏季演奏会	二河公園音楽堂	『中国新聞』8 月 26 日
◎ 9 月 9 日 (土)	夏季演奏会	二河公園音楽堂	『中国新聞』8 月 26 日
大正 12 年 (1923 年)			
	6 月 9 日 (土)	二河公園音楽堂	『中国新聞』6 月 9 日
	6 月 15 日 (金)	呉水交支社	『中国新聞』6 月 9 日
◎ 6 月 23 日 (土)	夏季演奏会	二河公園音楽堂	『中国新聞』6 月 23 日
	6 月 30 日 (土)	呉水交支社	『中国新聞』6 月 9 日
	7 月 7 日 (土)	二河公園音楽堂	『中国新聞』6 月 9 日
	7 月 14 日 (土)	呉水交支社	『中国新聞』6 月 9 日
◎ 7 月 15 日 (日)	夏季演奏会	二河公園音楽堂	『中国新聞』7 月 15 日
	7 月 21 日 (土)	二河公園音楽堂	『中国新聞』6 月 9 日
	7 月 26 日 (木)	呉工廠集会所主催演奏会	呉工廠集会所
	7 月 28 日 (土)	呉水交支社	『中国新聞』6 月 9 日
	8 月 18 日 (土)	呉水交支社	『中国新聞』6 月 9 日
	8 月 24 日 (金)	二河公園音楽堂	『中国新聞』6 月 9 日
	9 月 8 日 (土)	呉水交支社	『中国新聞』6 月 9 日
	9 月 19 日 (水)	二河公園音楽堂	『中国新聞』6 月 9 日
	9 月 22 日 (土)	呉水交支社	『中国新聞』6 月 9 日
大正 13 年 (1924)			
◎ 4 月 21 日 (月)	「呉デー」公開演奏会	二河公園音楽堂	『呉新聞』4 月 21 日

(次頁へ続く)

日時	演奏会名	場所	出典
大正 14 年 (1925)			
◎ 4 月 4 日 (土)	管弦楽公開演奏会 (管弦楽)	五番町小学校講堂	『中国新聞』4 月 3 日
◎ 5 月 10 日 (日)	銀婚式奉祝演奏會	五番町小学校講堂	『中国新聞』5 月 8 日
◎ 5 月 23 日 (土)	管弦楽演奏会 (管弦楽)	呉水交支社	リーフレットほか
◎ 5 月 27 日 (水)	海軍記念日記念演奏会	五番町小学校講堂	『呉新聞』5 月 26 日
◎ 7 月 11 日 (土)	夏季演奏会	二河公園音楽堂	『呉新聞』7 月 10 日
◎ 7 月 18 日 (土)	夏季演奏会 (管弦楽)	呉水交支社	『呉新聞』7 月 19 日
◎ 8 月 29 日 (土)	夏季演奏会 (管弦楽)	五番町小学校講堂	『呉新聞』8 月 28 日
◎ 9 月 12 日 (土)	夏季演奏会 (吹奏楽)	二河公園音楽堂	『呉新聞』9 月 12 日
◎ 9 月 19 日 (土)	夏季演奏会 (管弦楽)	五番町小学校講堂	『呉新聞』9 月 19 日
◎ 9 月 26 日 (土)	夏季演奏会	五番町小学校講堂	『呉新聞』9 月 26 日
大正 15 年 (1926)			
6 月 26 日 (土)	夏季演奏会	呉水交支社	『呉新聞』6 月 22 日
◎ 8 月 21 日 (土)	夏季演奏会 (吹奏楽)	呉水交支社	『呉新聞』8 月 22 日
8 月 22 日 (日)	夏季演奏会	広集会所	『呉新聞』8 月 22 日
◎ 9 月 4 日 (土)	夏季演奏会 (管弦楽)	呉水交支社	『呉新聞』9 月 4 日
◎ 9 月 11 日 (土)	夏季演奏会 (吹奏楽)	二河公園音楽堂	『呉新聞』9 月 4 日
◎ 9 月 18 日 (土)	夏季演奏会 (吹奏楽)	二河公園音楽堂	『呉新聞』9 月 17 日
9 月 25 日 (土)	夏季演奏会 (管弦楽)	呉会館	『呉新聞』7 月 4 日
昭和 2 年 (1927)			
◎ 7 月 29 日 (金)	夏季演奏会	二河尋常小学校校庭	リーフレットほか
◎ 8 月 27 日 (土)	夏季演奏会 (管弦楽)	五番町小学校講堂	リーフレットほか
9 月 17 日 (土)	管弦楽演奏会 (管弦楽)	賀茂郡広村公会堂	『呉新聞』9 月 16 日
昭和 3 年 (1928)			
◎ 5 月 27 日 (日)	海軍記念日記念演奏会	二河公園音楽堂	『呉新聞』5 月 25 日
◎ 6 月 16 日 (土)	夏季演奏会 (管弦楽)	呉水交支社	『呉新聞』6 月 15 日
◎ 6 月 23 日 (土)	夏季演奏会 (管弦楽)	五番町小学校講堂	『呉新聞』6 月 26 日
◎ 7 月 28 日 (土)	夏季演奏会 (吹奏楽)	二河公園音楽堂	『呉新聞』7 月 27 日
◎ 8 月 25 日 (土)	夏季演奏会	呉水交支社	『呉新聞』8 月 24 日
◎ 9 月 8 日 (土)	夏季演奏会	呉水交支社	『呉新聞』9 月 7 日
◎ 9 月 14 日 (金)	広島放送局出演	不明	『呉新聞』9 月 14 日
◎ 9 月 22 日 (土)	夏季演奏会 (管弦楽)	五番町小学校講堂	リーフレットほか
◎ 9 月 29 日 (土)	秩父宮殿下御結婚奉祝演奏会 (吹奏楽)	二河公園音楽堂	リーフレットほか

(各種資料に基づき竹下作成)

実際には天候の関係で延期または中止となったものも存在すると思われる。実際に、大正十年九月二九日木曜日の演奏会は、『芸備日日新聞』ではもともと二四日土曜日に挙行と報じられていた。⁽¹³⁾『芸備日日新聞』ではその後訂正はなされていないが、『中国新聞』では、二四日は天候の関係で聴衆が少なかったために、二九日に変更したと報じられている。⁽¹⁴⁾演奏会名についてであるが、出典資料に名称が記載されているものは、旧字体は現在使用されているものに訂正の上、記載した。とくに名称のない場合は、演奏会趣旨を記載した。また、夏季の毎土曜日に定期的に開催された公開演奏会については、その名称を「夏季演奏会」に統一している。大正十四（一九二五）年から呉海兵団軍楽隊に管弦楽編成が導入されたが、それ以降判明しているものについては、演奏会の編成を明記している。出典の新聞資料は、すべて演奏会開催年の発行のものである。

今回、大正九年から昭和三年までの九年間を調査した結果、全部で五八回の演奏会の開催を確認することができた。そこから新たに明らかになったのは、以下三点である。

まず一点目は、演奏会の開催時期が四月から九月に限られていることである。六月から九月に開催されていた夏季演奏会を含め、すべて四月から九月までの間に開催されており、それ以外の時期には行われていない。

ちなみに、表では大正十三（一九二四）年の夏季演奏会の記録がないが、これは参照した呉市産業部海事歴史科学館学芸課提供の『呉新聞』の大正十三年六月から大正十四年四月分までが欠けているため、実際には例年通り夏季演奏会がとり行われていたのではないかと考えられる。同時期の『中国新聞』には、残念ながら呉海兵団軍楽隊の単独演奏会についての報道はない。また、例年六回以上行われている夏季演奏会が、昭和二年では二回に限られているのは、大正天皇の諒闇期間中であつたためである。本来ならばすべて中止になるはずであつたが、市民からの熱心な要望によって、二回に限って実現したという。⁽¹⁵⁾大正十一年も三回と少ない回数となっているが、こちらの原因については現在のところ不明である。

二点目は、開催場所が呉市周辺に限られていることである。二河公園音楽堂、呉水交支社、呉工廠集会所、五番町小学校講堂などは、すべて呉市の建物である。

大正十五（一九二六）年および昭和二年には賀茂郡広村で演奏会が行われているが、これも現在では呉市に編入されている地域で、この時代には県内のほかの場所での単独の演奏会が行われていなかったようである。ただし、広島県以外の場所に関しては、軍艦等へ乗艦し航海を行った際に、神戸や大阪⁽¹⁶⁾、さらには大連⁽¹⁷⁾にて公開演奏を行ったという記録が残っている。

三点目は、大正十四年頃から、演奏会を通して市民との間に相互の働きかけが見られるようになったことである。大正十四年の『呉新聞』では、市民から「高村軍楽兵曹長のバイオリン演奏が聴きたい」という投書があつた⁽¹⁸⁾ことや、「初めは理解する人がなかつたので公演曲目も極く平易なものを撰んで居ましたが今は聴衆の耳が訓練されて『もう少し高級なものを』『シンホニーを』演奏して呉れ等と云ふ投書が軍楽長の許へドシドシ舞ひ込む様になつたのだから驚いたもの⁽¹⁹⁾」という評が報じられている。また、河合太郎の、「近頃呉地方の人等が音楽に非常に理解を持つに到つた事は私も誠に喜ぶと同時に軍楽隊としての研究も極めて猛烈です⁽²⁰⁾」という言葉も紹介されている。このような報道は、大正十三年以前には見られない。

そして実際に、プログラム内容にもその影響が現れている。大正十四年九月十二日の演奏会は、「洋楽に對して初歩の私達のためにも又極めて平易な洋楽を混て頂けますならどれだけ幸福でせう」という手紙での要望にこたえて、日本曲を中心としたプログラム編成を行つている（表2）。⁽²¹⁾また、ただ要望にこたえるだけでなく、この頃からテーマを設定したプログラム編成という試みも見られる。同年九月十九日には、ロシア曲が流行していることをふまえ、ロシアものを主としたプログラム編成（表3）⁽²²⁾、さらにその一週間後の九月二六日には、組曲を多く編成（表4）⁽²³⁾、といった具合である。このように、プログラムにテーマを持たせるといふ試みも、大正十三年以前には見られない。これも呉海兵団軍楽隊から市民への働きかけの一種であろう。このようなテーマを決めたプログラム編成は、大正十四年以降たびたび見られる。

三 市民団体への客演

続いて、市民団体への客演における奏楽の実態をみていく。表5に、大正九

表 2 大正 14 年 9 月 12 日演奏会プログラム

大正 14 年 9 月 12 日 (土)		於：二河公園音楽堂 指揮：河合太郎 編成：吹奏楽
第 1 部		
行進曲	ブレッセン	ゴールデ
接続曲	音楽の鞆	三田正美編
円舞曲	明治の面影	佐野軍楽長編
戦争描写曲	デリー征討軍	プライドハム
第 2 部		
長唄	小鍛冶	田中軍楽長編
支那楽	浸板流水、大湖船	吉本軍楽長編
箏曲	千鳥	佐野軍楽長編
大序楽	ウィリアム・テル	ロシニー

(『呉新聞』大正 14 年 9 月 11 日)

表 3 大正 14 年 9 月 19 日演奏会プログラム

大正 14 年 9 月 19 日 (土)		於：五番町小学校講堂 指揮：高村吉一 編成：管弦楽
第 1 部		
フォックス・トロット	鰐	モッアン、アリスト合作
組曲中より	マヅルカ舞曲	グラツウノフ
小品	ラルゴー	ヘンデル
小品	クッコー	アアレンスキー
歌劇抜粋	ユージン・オネーギン	チャイコフスキー
第 2 部		
序楽	潜水夫	ケルビニー
胡桃割	行進曲、支那の舞踏、アラビヤの舞踏、露西亞トレパック舞踏	チャイコフスキー
瞑想曲		ヴィュータン
歌劇	ファウスト	グノー

(『呉新聞』大正 14 年 9 月 18 日)

表 4 大正 14 年 9 月 26 日演奏会プログラム

大正 14 年 9 月 26 日 (土) 19:00-		於：五番町小学校講堂 指揮：高村吉一
第 1 部		
序楽	愛の泉	バルフ
マヅルカ	紫堇	アイレンベルグ
二つの印度舞曲	狩祭のダンス、戦闘ダンス	スキルトン
組曲	ペーアギント 朝、アーゼの死、アユートラの舞踏、山の王の殿堂	グリーク
第 2 部		
組曲	明媚なる場面	マスネー
詩楽	天使の夢	ルビンスタイン
歌劇	ミニヨン	トーマス
ロングサインの変奏曲		トバニー

(『呉新聞』大正 14 年 9 月 26 日)

曲名、作・編曲者名ともに原文ママ、旧漢字のみ新字体に変更

表 5 市民団体への客演の記録

日時	演奏会名	場所	出典
大正 9-11 年 (1918-22)			
記録なし			
大正 12 年 (1923)			
4 月 23 日 (月)	広島市立高等女学校音楽会	不明	渡辺弥蔵 1954『広島音楽 (書写)』 ⁽²⁴⁾
◎ 10 月 29 日 (月)	市立高等女学校音楽演奏会	市公会堂	『中国新聞』10 月 29 日
大正 13 年 (1924)			
記録なし			
大正 14 年 (1925)			
◎ 10 月 9 日 (金)	呉市立高等女学校秋の音楽演奏 会	五番町小学校講堂	『中国新聞』10 月 3 日ほか
◎ 10 月 10 日 (土)	広島市立高等女学校音楽会	不明	『中国新聞』10 月 16 日
大正 15 年 (1926)			
◎ 1 月 25 日 (日)	五日市小学校落成記念音楽会	不明	『中国新聞』1 月 21 日
◎ 2 月 25 日 (木)	高田郡児童音楽大会	吉田常盤座	『中国新聞』2 月 27 日
	2 月 28 日 (日)	進徳高等女学校音楽会	進徳高等女学校講堂
◎ 6 月 25 日 (金)	地久節祝賀「講演と音楽の会」	呉会館	『中国新聞』6 月 12 日
	10 月 27 日 (水)	広島市立高等女学校音楽会	不明
◎ 11 月 7 日 (日)	県立呉高等女学校音楽会	呉会館	『呉新聞』11 月 6 日
	11 月 28 日 (日)	呉市立高等女学校音楽会	五番町小学校講堂
			『呉新聞』11 月 26 日
昭和 2 年 (1927)			
◎ 6 月 7 日 (火)	厳島音楽演奏大会	厳島尋常高等小学校	リーフレットほか
昭和 3 年 (1928)			
◎ 2 月 11 日 (土)	紀元節日呉市学童奉祝音楽会	五番町小学校講堂	リーフレットほか

(各種資料に基づき竹下作成)



写真 2 呉海兵団の吹奏行進 (大正 12 年) (三浦精子氏所蔵)

年から昭和三年までの、呉海兵団軍楽隊による市民団体への客演の記録をまとめている。

市民団体による演奏会への客演について、明らかになった点は次の三点である。

まず一点目は、「市民団体」のすべてが教育機関であることである。今回調査して判明した十三件の演奏会すべてが女学校や小学校といった、教育機関によって開催されたものであった。とくに女学校は非常に多く、広島市立高等女学校、呉市立高等女学校、進徳高等女学校など、数多くの女学校と共演している。戦後、河合太郎は新聞のインタビューに対して、「上官から『軍より学校から給料をもらえ』といわれた」と語っており、⁽²⁵⁾ 彼が軍楽長だった時代に熱心に教育機関との連携を行っていたことがわかる。

当時の呉市には、「呉ハーモニカソサィティ」や「呉マンドリンクラブ」といった市民楽団が存在した⁽²⁶⁾が、それらの団体との共演の記録は確認できなかった。また、丁未音楽会などの広島市内の演奏会への出演の記録も、認めることはできなかった。

『広島音楽（書写）』によると、広島市立高等女学校の音楽会への出演は、太平洋戦争の中ごろまで継続して行われていたようである。⁽²⁷⁾ また、昭和十七（一九四二）、十八（一九四三）年に呉海兵団軍楽隊に在籍していた平岡啓三という人物の回顧録によると、呉市立高等女学校、広島県立高等女学校の音楽会への出演も、その頃まで続いていたようである。⁽²⁸⁾ これらの点については、昭和四（一九二九）年以降の一次資料を継続して調査することによって、その裏付けをとっていきたい。

次に二点目は、単独での演奏会と異なり、開催時期も地域も広範囲に及んでいることである。市民団体への客演では、一月や二月、十一月といった、単独での演奏会が開かれなかった月の演奏会にも参加している。また、単独演奏会と異なり、呉市以外の場所にも多く出向いている。広島市はもちろんのこと、現在の地名で安芸高田市や廿日市市といった遠い地域まで赴いているのである。こういった点から鑑みて、市民団体による演奏会への客演は、普段呉海兵団軍楽隊の演奏に触れることのない県内地域の人々への格好の音楽提供の場であったということができる。

最後三点目は、大正十四年から、コーラスの伴奏という新しい取り組みを行っていることである。この点に関しては、『中国新聞』および『呉新聞』の両紙が、大正十四年十月九日の呉市立女学校の音楽会において、呉海兵団軍楽隊が初めて合唱の伴奏を行うことを報じており、⁽²⁹⁾ 関心の高さが伺える。この時演奏したのはウェーバーの『魔弾の射手』の伴奏だったようである。

また、翌十日には、広島市立高等女学校の演奏会でも『タンホイザー』の合唱伴奏を行っている。呉海兵団軍楽隊の管弦楽編成が広島市において披露されたのはこの時が初めてで、「慾をいへばも少し絃の人々の多からん事であるが、官命による人員は如何とすべくもない譯である」という評が新聞紙上でなされている。⁽³⁰⁾

合唱伴奏は、その後大正十五年六月二五日、大正十五年十一月七日の演奏会でも行われている。それ以外は、すべて呉海兵団軍楽隊が招聘されて客演を行ったもので、招聘した側との共同での演奏は行われていない。

おわりに

今回大正九年から昭和三年までの九年間の呉海兵団軍楽隊の音楽実態を、単独演奏会と、市民団体演奏会への客演という二つの側面から調査した。それらの結果を照らし合わせた結果、以下三点のことが明らかとなった。一点目は、軍楽隊単独の演奏会は時期、地域ともに限定されていたのに対して、地域市民との共演ではその範囲が広がっていたこと、二点目は、この時期における市民団体との共演は、教育機関に限られていたこと、三点目は、大正十四年を境に、市民からの要求を反映したプログラム作成や、合唱の伴奏など、新たな取り組みを数多く行っていたことである。今後は大正八（一九一九）年以前および、昭和四年以後の調査を引き続き行うことによって、呉海兵団軍楽隊の音楽実態をさらに明らかにしていきたい。とくに、大正十四年ごろから充実の兆しを見た活動内容が、昭和四年から終戦までの間にどのように変化していくのかを追っていくことは非常に重要であるといえる。

また、今回の調査で四〇〇曲を超えるレパートリーが明らかとなったが、残念ながら本稿では、紙面の都合上その内容についてほとんど言及することは

きなかった。その点についても、今後さらなるレパートリーデータベースの拡充を図るとともに、詳しい分析、考察を行っていきたいと考えている。

【付記】

末筆ながら、本稿作成にあたり、資料閲覧の便を賜った、呉市産業部海事歴史科学館学芸課市史編さん係の方々、海上自衛隊呉音楽隊の方々に深く感謝申し上げます。

注

- (1) 「呉海兵団軍楽隊が広島音楽普及に果たした役割―先行研究と今後の課題―」『広島音楽史』編纂に向けて（第一回中間報告集）戦前の広島における音楽の普及、竹下可奈子、「広島音楽史」プロジェクト編、二〇一三
- (2) 「呉海軍楽隊が学校教育に及ぼした影響」『音楽の世界』第四一巻 第四号、十一―十八頁、道下京子、二〇〇二ほか
- (3) 「昭和初期における海軍軍楽隊と地域―呉海兵団付軍楽隊と『音楽都市』呉を事例に（特集 戦争と音楽）」『軍事史学』第四四巻 第二号、四三―六一頁、桑原功一、二〇〇八ほか
- (4) 「呉海軍楽隊」一―五〇『呉日日新聞』、久保田利数、一九七一（資料提供 呉市産業部海事歴史科学館学芸課）
- (5) 『海軍楽隊…日本洋楽史の原点』、五七頁、楽水会編、国書刊行会、一九八四―五
- (6) 『毎日新聞』昭和四三年十月三〇日（資料提供 海上自衛隊呉音楽隊）
- (7) 『中国新聞』昭和四一年十一月二五日（資料提供 海上自衛隊呉音楽隊）
- (8) 海上自衛隊呉音楽隊保有資料
- (9) 『中国新聞八十年史』、一二九頁、中国新聞社史編纂委員会編、一九七二
- (10) 『中国新聞八十年史』、九八頁では大正十四年五月一日創刊とあるが、呉市産業部海事歴史科学館学芸課には大正十三年一月十日の創刊号が残されている。
- (11) 『中国新聞八十年史』、九七―九八頁
- (12) 「呉海軍楽隊」二五『呉日日新聞』、久保田利数、一九七一（資料提供 呉市産業部海事歴史科学館学芸課）
- (13) 『芸備日日新聞』大正十年九月二四日（呉市産業部海事歴史科学館学芸課提供）
- (14) 『中国新聞』大正十年九月二九日

- (15) 『呉新聞』昭和二年七月二二日（呉市産業部海事歴史科学館学芸課提供）
- (16) 『呉新聞』昭和二年六月二二日（呉市産業部海事歴史科学館学芸課提供）
- (17) 『呉新聞』大正十五年九月十四日（呉市産業部海事歴史科学館学芸課提供）
- (18) 『呉新聞』大正十四年八月二八日（呉市産業部海事歴史科学館学芸課提供）
- (19) 『呉新聞』大正十四年九月十二日（呉市産業部海事歴史科学館学芸課提供）
- (20) 『呉新聞』大正十四年八月二八日（呉市産業部海事歴史科学館学芸課提供）
- (21) 『呉新聞』大正十四年九月十二日（呉市産業部海事歴史科学館学芸課提供）
- (22) 『呉新聞』大正十四年九月十九日（呉市産業部海事歴史科学館学芸課提供）
- (23) 『呉新聞』大正十四年九月二六日（呉市産業部海事歴史科学館学芸課提供）
- (24) 『広島音楽（書写）』、九頁、渡辺弥蔵、一九五四（広島市公文書館所蔵）
- (25) 海上自衛隊呉音楽隊保有資料
- (26) 『呉市史』第六巻、六七七―六八〇頁、呉市史編纂室編、一九八八
- (27) 『広島音楽（書写）』、九頁
- (28) 『海軍楽隊…花も嵐も…』、六五頁、針尾玄三編、常数英男監、近代消防社、二〇〇〇
- (29) 『中国新聞』大正十四年十月三日および『呉新聞』大正十四年十月四日（呉市産業部海事歴史科学館学芸課提供）
- (30) 『中国新聞』大正十四年十月十六日